

「第四回日銀グランプリ」 「キャンパスからの提言」 の決勝開催

▼日本銀行では、昨年十二月六日、大学生を主な対象とする金融経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第四回 日銀グランプリ」キャンパスからの提言」の決勝を本店において開催しました。今回のテーマは、「わが国の金融を巡る課題と処方箋」。わが国の金融を巡る現状を踏まえ、金融システムや金融市場など、金融を巡る課題を取り上げ、それに対する具体的な処方箋を提案してもらいました。全国から八一編もの多数の論文が寄せられ、応募要領に沿った一次審査の結果、五チーム（名古屋市立大学経済学部、一橋大学経済学部、明治大学商学部、同大政治経済学部、東京経済大学経済学部）が決勝に進出しました。また、惜しくも決勝進出には至らなかったものの、決勝進出チームに次ぐ上位にランクされた八チーム（琉球大学、明治大学、成城大学、福島大学、香川大学、信州大学、東京経済大学、法政大学）を「佳作」に選定させていただきました。



各チームによるプレゼンテーションの様相

▼決勝当日は、日本銀行本店において、決勝進出チームがそれぞれ一五分間のプレゼンテーションを行った後、審査員からの質問に答えるというかたちで進められました。審査員には、川本裕子氏（早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授）、小枝至氏（経済同友会副代表幹事・日産自動車株式会社相談役名誉会長）をお招きしたほか、日本銀行から西村清彦副総裁（審査員長）、亀崎英敏政策委員会審議委員、井戸清人理事が参加しました。審査終了後、審査員長から、「回を重ねるに連れ、現状分析の綿密さや論旨の明快さなどの点でレベルアップしてきている」「特に決勝に残った作品は、基本的に構成が

しっかりしており、課題解決に向けた処方箋の具体性も高かった」との総評がありました。

▼厳正なる審査の結果、最優秀賞には、名古屋市立大学経済学部チームの「中小企業金融のビジネスマッチング ファイナンスエキスポの提案」が選ばれました。「現状分析に当たり、実際に地元の中小企業や信用金庫にインタビューを行った実行力」や「地道な調査を経て地元の関係者の生の声が反映された提案内容に説得力があった」点などが高く評価されました。このほか優秀賞二チーム、敢闘賞二チームを、以下の通り選出しました。五チームの作品全文および審査員の講評は、日本銀行HPに掲載されています。

<http://www.boj.or.jp/type/release/adhoc/grand0812b.htm>

【最優秀賞】

●名古屋市立大学経済学部チーム

「中小企業金融のビジネスマッチング ファイナンスエキスポの提案」

【優秀賞】

●一橋大学経済学部チーム

「大学発地域密着型ベンチャーファンドの形成」地域に根差した大学ベンチャー支援のしくみ」

●明治大学商学部チーム

「電子マネーと企業ポイントの新たな交換システムの構築」

【敢闘賞】

●明治大学政治経済学部チーム

「しあわせ@ホーム」日本における中古住宅市場形成と資産形成に



審査員からは厳しい質問が次々と



最優秀賞に輝いた名古屋市立大学チームと審査員の皆さん

むけて」

●東京経済大学経済学部チーム

「日本版金融経済教育システムの構築へ向けて」ライフステージ別金融経済教育の導入」

▼「日銀グランプリ」キャンペーンからの提言」は、来年度も開催する予定ですので、全国の大学などで学ぶ皆さんには引き続き、斬新でユニークな発想を用いて挑戦していただけることを心から期待しています。

「にちぎん☆NIGHT」等の開催

▼日本銀行本店では、昨年十二月二十二日および二十四日から二十六日の四日間、白川総裁ほかによる「市民講座」を中心とした



白川総裁の市民講座の様相

催事「にちぎん☆NIGHT」を実施いたしました。初日の二十二日夕刻に開催された「市民講座」では、「日本銀行への招待」という演題で、白川総裁が、お集まりいただいた約二四〇名の方々に、日本銀行の仕事などについてご説明させていただきました。皆さん熱心に耳を傾けてくださり、また、参加者の方から鋭い質問を頂戴するなど、一時間という短い時間ではありましたが、参加された方々にご好評をいただくことができました。白川総裁の当日の講演内容は、日本銀行HPに掲載されています。

<http://www.boj.or.jp/type/press/koen07/ko0812f.htm>

▼今回の催事は、名橋「日本橋」保存会等による「年の瀬日本橋二〇〇八」『ECO EDO 日本橋』グリーンプロジェクト』と銘打ったイベントに併せて開催しました。このイベントでは、使用する電力を風力発電や人力発電による「グリーンパワー」で一部

まかなうなど、環境にやさしい運営がなされたさまざまなプログラムが行われました。日本銀行本店本館前庭では、大きなヒマラヤ杉三本の周囲に、振動を電力に変換する新技術「発電床」を設置。参加者が「発電床」を踏むことにより発生した電気を、ヒマラヤ杉に取り付けられたクリスマス・イルミネーションの一部として利用し



日銀本店本館前庭のヒマラヤ杉のイルミネーション（左）。「発電床」を踏み、ヒマラヤ杉に光を灯す点灯式の出席者（右上）。日銀本店本館前庭に設置された大分県竹田市の竹灯籠（右下）。

編集後記

■先日、3年半ほど前に大阪の国立文楽劇場で人形遣い吉田玉男さんの最後の舞台を見て以来、久し振りに文楽を楽しみました。人間国宝・竹本住大夫さんの、体の中から搾り出すような心に染み入る語り、ユネスコが世界無形遺産に選んだ、文楽の高い芸術性を改めて実感しました。わが国が世界に誇る文楽をはじめとして、能狂言、落語から浪曲、講談に至るまで、そのルーツが実は仏教の説教にあることを知っている人はそれほど多くはないでしょう。

関山先生が長年その継承にご尽力されてきたおかげで、節談説教は現在も細い糸として辛うじて残っていますが、まだ地方では生きた説教として語られていた30年以上前に俳優の小沢昭一さんたちが残した節談の音源(CD)は、そうした歴史を語る記録として貴重なだけでなく、現代に生きるわれわれにとっても、住大夫さんの語りと同様、心に響くことに驚かされます。(恵谷)

■単線を1両で走る福井のえちぜん鉄道は、一度は廃線となりながらも、地元の方々の力で復活を果たした「みんなの電車」です。朝の通勤・通学時、改札を駆け込む男の子に駅員さんから「走らなくても大丈夫」と優しく声が掛かり、アテンダントさんからは「おはようございます」と一人一人に笑顔の挨拶が。毎日殺伐とした満員電車に揺られる身にはうらやましい光景でした。えち鉄が目指すのは「地域共生型サービス企業」。公共交通を未来の子供たちに残すためだけでなく、電車を軸にした地域の活性化も図ろうとしています。赤字を嘆くよりも、自分たちができることからまず動く。「乗って残す運動」の輪が広がっていくことを願います。(A U)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページに掲載していますのでご利用ください。

(<http://www.boj.or.jp/type/pub/nichigin.htm>)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解については、日本銀行ホームページ(<http://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2009年 春号
編集・発行人 恵谷英雄
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎ 03-3277-2405

デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
© 日本銀行情報サービス局 禁無断転載

※本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。

ました。初日の点灯式には白川総裁も出席し、あいにくの雨模様でしたが、青や白色の美しい光が灯されると、周囲から歓声が上がりました。

▼続く二十四日から二十六日の「市民講座」では、「お札の話」「景気の見方」「日本銀行本店本館 その歴史と変遷について」をテーマに、それぞれ実際に事務に携わっている本行職員が自らの知識や経験を活かしながら、写真や図などを使って分かりやすくご説明させていただきました。

■ご参加された方には、講座終了後、本店本館の地下金庫などをご案内いたしました。今回は、通常の見学ツアーではご

案内していない地下金庫内の小部屋にお入りいただき、一千億円分の模擬券のバックなどを間近にご覧いただいたり、屋外灯の灯った日銀本館の中庭の風情を楽しんでいただくなど、いつもとは一味違った見学ツアーを体験していただ

きました。お勤め帰りの方にもご参加いただける時間帯であったこともあり、数多くのさまざまな方々にお楽しみいただくことができました。

▼日本銀行では、今後も皆さまのお役に立てるような催事を実施して参りますので、ご参加いただければ幸いです。なお、日本銀行見学ツアーは、事前のお申し込みをいただければ、随時ご参加いただけま



発券局長による市民講座「お札の話」の様相



日銀本店本館の中庭

す。併せて皆さまのお越しをお待ちしております。

* 日本銀行見学ツアーの詳細は、日本銀行HPをご覧ください。
<http://www.boj.or.jp/type/etc/service/annai03.htm>

34